

爆乳少女の裏垢事情

本当にいたんだ。それが、せーらさんを初めて目にした感想だった。

何度もお世話になっているのに、モニターの中の存在だから心のどこかで加工画像とか最近流行りのAIによる生成物だと思っていた自称Nカップのおっぱい。

小柄な体に不釣り合いなほどに大きく、普段の生活に支障をきたしそうなくらい前方にせり出ている。けれどそのアンバランスな体型が逆に魅力的で。

これほどまでに魅惑的な……いや、カッコつけて言うのはやめよう。エッチな体付きの女性がこの世に実在しているのが信じられなかった。

駅内のカフェに入った彼女は大きめのバックを手にキョロキョロと辺りを見回し、すぐに僕を見かけ小走りに駆け寄ってきた。服装は紫のパーカーに短いスカート。伸縮性のある生地詰め込まれたおっぱいは、谷間に食い込むカバンの紐のせいでよりくっきりと輪郭を強調され、一歩ごとにたぶんたぶんと音の聞こえてきそうなくらい大げさに揺れていた。

マスクのせいで顔は不明瞭。そもそも素顔を知らない初対面だ。けれど金髪のピッグテールと顔のすぐ下にある強烈な存在感が、目の前の人物が待ち合わせた彼女だという証明だった。

生で見た彼女の姿の強烈なインパクトに、僕は初めましてと挨拶することすら忘れて、コーヒークップに口をつけたまま固まっていた。

見惚れてしまっていた。

その巨乳と言う言葉は足りない、爆乳としか形容できないおっぱいに。

「あのお、カモスケせんせえ……ですよ？」

舌っ足らずに訊ねられたのは僕のペンネームだった。

「あ、はい……そうです、えと……せーらさんですよ。はじめまして、でいいのかな？」

胸を見過ぎないようにしつつ照れを誤魔化すように笑ってみせる。緊張で顔が火照っていた。クーラーが効いた店内の空気は冷たく、顔が余計に熱く感じた。

と、周囲の視線がこちらに向いていることに気が付いた。周りの男の客やカウンターの中にいる女性店員もせーらさんの存在感に目を奪われていた。

「うん、はじめまして♪ 待たせちゃってごめんね」

せーらさんは僕の座っていた二人掛けの四角いテーブルの反対側に腰かけた。その僅かな動作でさえ、薄い布地に詰まったおっぱいが揺れて視線を誘引してくる。

「いえ、僕も今来た所なんで」

せーらさんは予定の時間に五分遅れで来た。一方で僕は予定より二十分も前にこの店に入っていた。そんな見え透いた嘘を、彼女はくすくすと笑って受け流した。童貞丸出しの僕と余裕のある彼女との間には物凄い経験値の差があるように思えた。

「それでね、せんせえ……いきなしなんだけど、先に伝えておきたいことがあるんだ……やっぱり、せんせえ相手に隠しておくのは悪いかなって思って……」

せーさんは声を潜め、テーブルに身を乗り出して顔の前で小さく手招きした。

大きな声で言えないという仕草。得体のしれない不安感に襲われつつも僕は彼女の口元に耳を寄せた。吐息が耳たぶをそっと撫でた。

「あのね……せーら、実は……」

その先の言葉を聞いた瞬間、僕の背筋は凍り付いた
告げられたのは彼女の年齢だった。

せーさんではなく、せーらちゃんと呼ばなければいけない年齢だった。

せーさんと僕が知り合ったのはSNSだった。彼女は素性を隠してSNS上に自撮り——主に男の性欲を満たすためのエッチな自撮り——をアップする裏垢女子とか自撮り垢とか呼ばれるタイプのアカウントの運営者だ。主に自慢の胸を強調した着衣画像や谷間の画像をスマホで撮影し短いコメント付きでアップしていた。時には味変なのか職業や立場を連想させる衣装やアニメキャラのコスチュームを着用した画像もあった。

それらの画像はSNSの規約からはみ出さないギリギリのライン上にあるもので、いわば釣り餌だった。より過激でセンシティブな内容の、平たく言えばズリネタになるものは支援系のファンサイト——有料の会員になってクリエイターなどを支援したり、コンテンツを閲覧したりするサイト——にアップされていた。

ソシャゲキャラみたいなかいいおっぱいが好きな男というのは多い。されどもソシャゲキャラみたいにでかいいおっぱいというのはリアルではなかなかお目にかかれない。しかるにその稀有な存在を拝むために毎月お金を払ってもいいという男はごまんといえるらしく、彼女は爆乳自撮り界隈では非常に人気が高かった。フォロワーは6桁に届き、一か月千円へのファンサイトの方もかなりの支援者がいるようだった。

最初から多くのファンがいたわけではなかった。仕込みもコネもない場合、誰しものがフォロワーは0から始めなければいけない。インターネットで多くの人目に触れる、いわゆるバズるという現象が発生するには、元々持つ魅力や能力だけじゃなくきっかけや運が必要だからである。

そしてそのきっかけとなったのが僕だった。

去年の十月ごろのことだ、いつものように資料兼オカズを探してSNSで裏垢の爆乳アカウントを検索していると、見慣れない、けれど驚くほど大きなサイズのおっぱい画像を上げている人がいた。目元を手で隠して、胸元の開いたセクシーなセーターを着用し、胸の谷間に挟んだ瓶容器から牛乳を飲んでいる画像で「ただいまおっぱい育成中」とコメントをつけていた。瓶のラベルにはおっぱいミルクという文字が見えた。バストが大きすぎるせいで二百ミリリットルの容器は乳酸菌飲料の容器と錯覚するほど小さく見えた。

気が付けば指先は「せーら」という短いアカウント名とフォローボタンをタップしていた。画像が投稿されたのは十分ほど前で、そのインパクトのわりにほとんど伸びていなかった。

当時のフォロワー数は四十程度で、アカウント開設時期は十月。開設して間もないことは明らかだった。すぐに^{ダイレクトメッセージ}DMで簡単な挨拶と「さっき上げた画像をイラスト化してもいいだろうか」という意味の文章を送った。

僕の仕事は絵を描くことだった。同人作品やソーシャルゲームのイラストを依頼されたり自分でも同人CG集を作ったりしていた。イラストレーターというよりも絵師と呼ばれることの方が多かった。こういった自撮り垢の画像を参考にして絵を描くと、ウケることも多かったし、相手にも喜ばれた。フォロワーも増えるし練習にもなった。けれど、最低限許可は取らないといけない。許可を取らずに勝手にイラスト化し、トラブルを招いた同業者を見たこともある。

返事を待つ間に下書きに取り掛かっていた。渋い返事をもたらしても構図の似た別の絵に仕上げればいいと思っていた。

結果としては快い返事がもらえた。メディア欄の画像を遡ったらしく、僕のイラストをとでも上手で素敵だと思った、だから自分のイラストを是非描いて欲しいし見てみたいとのことだった。その率直な称賛の感想がむず痒かった。先生と呼ばれるのも。

普段の倍近い速さで色塗りまで終え、せーらさんのアカウントを記載して投稿したイラストは、僕自身の四万人ほどいたフォロワー数も手伝って物凄い勢いで拡散された。

けれどだからといって自分のおかげ、と言い切るのはイタいと僕は考えていた。

きっかけではあるけれど、きっかけはきっかけに過ぎない。いつか自分以外の誰かの目に留まってイラスト化してバズったかもしれないし、それとは関係なくバズったかもしれない。けれど、イタい考えに浸るのは心地いいものだ。自分が育てたという自意識過剰でキモイ優越的な意識は僕を満足させた。せーらさんの方でも、僕のおかげでアカウントが大きくなったと思ってきているようだった。

僕は暇を見つけてはせーらさんの自撮りをイラスト化した。ウケがよかったし、自分でも描きたかったし。それに、イラストを毎回素直に褒めてくれるのも嬉しかった。

もちろん、下心もあった。せーらさんはイラストのお礼として、ファンサイトにも上げていない秘密の画像や動画を送ってくれた。「いつもお世話になってる先生だけ特別♡」らしかった。それはファンサイトに上がっているような露骨な物でもなければ、普段SNSにアップしているバッチリしたものでもなかったが、自分にだけくれた、という一点だけで価値があった。

もらった画像をオカズに僕は何度もオナニーをした。

いつかこんなおっぱいでパイズリして欲しい。このおっぱいに顔を埋めてみたい。赤ちゃんみたいに吸い付いてみたい。そんな妄想を抱きながら。

転機が訪れたのは六月の頭頃だった。いつものようにせーらさんのイラストを SNS に上げてしばらくすると、せーらさんからお礼のDMが届いていた。感謝の言葉をやり取りした後、ファンサイトにアップしようかと考えている新しいコスプレ画像を送ってくれた。

コスチュームは体操着。下は今どきらしからぬブルマという、男の性欲を煽る意思が丸わかりのエロ過ぎる格好だ。



体操着を捲り上げて挑発的な感じでそのスケベすぎる爆乳をこっそり、僕だけに見せてくれている。そんな優越感も感じるような構図だった。

「うわやっぱ……体操着なのが逆にエロ過ぎ……。これ着たままパイズリされたいですw」

と、興奮のあまりいつもより露骨なメッセージを送ってしまったほどだった。

送ってから、しまったと後悔した。付き合いがあるとはいえ、画像をオカズにしていることはお互い承知だとはいえ、今まで直接的に性的な意図を投げたことはなかった。そうしないように気をつけていたはずだった。軽い冗談のつもりだったが、草を生

やして誤魔化した風なのが余計に引かれそうだった。

「じゃあ、ホントにしてみます？ 直接会って、パイズリ♡」

けれど心配とは裏腹に、せーらさんは少しも嫌悪感を抱いていないようだった。

「マジで、いいんですか？」

「うん、カモスケ先生にはお世話になってますし……。そのお礼っていうか……。せーらパイズリ得意だから♡」

そうして、あれよあれよという間に翌週の火曜日に繁華街で会う約束を、つまりオフパコ（パコ無しズリ有り）の約束を取り決めたのだった。

せーらちゃんから年齢を告げられた僕はショックのあまり、彼女が席を立ってベルギーチョコココアを手に戻ってくるまで呆然としていた。

信じられなかった。けれど、マスクを外したその可愛らしい顔立ちと、チョコココアに口をつけて口の周りに茶色いヒゲを作っているその様子だけを見ると、告げられた年齢に間違いはないように思えた。

それでも少し視線を下にさげると、そこらの大人の女性どころか、巨乳が売りのグラビアアイドルですら太刀打ちできないほどの爆乳があった。

「えっとさ……さっきのその年のことなんだけど……冗談、だよ流石に……」

僕は縋るような思いでそう訊ねていた。冗談であって欲しかった。

「まだ信じられないの？ うーん、じゃあハイこれ」

そう言って彼女はパスケースから取り出したカードをこちらに見せてきた。マイナンバーカードだった。名前と住所の所は指で隠されていたが、印字された生年月日が大人であってくれという僕の願いを、公的な本人証明書類の強さで打ち砕いた。

誘われても絶対に手を出してはいけない対象だ。もし手を出せば犯罪者だ。ホントに手を出す最低のロリコンのレットルを張られて人生が終わる。なんなら、今まで送られた画像も全て削除しなければ単純所持で逮捕されてしまうかもしれない。

まさか、このことをネタに脅迫するつもりなのだろうか？

店内は暑くもないのに、背中がじっとりと汗ばんでいく。

「マジ、か……じゃあ、せーらちゃんはしょう——」

「まあいいじゃんそんなこと♪」

「よくないよ！ だって……わかってる？ せーらちゃんとそういうことしちゃったら、僕は警察に捕まっちゃうんだよ？」

「わかってるよ。だからホテルに行く前に言ってあげたんじゃん。せんせえのことは騙したくないし、捕まって欲しくもないから」

確かにそうかもしれない。騙して警察に突き出したり、それをネタに強請ったりするつもりならこのタイミングではなく、証拠を握った上でバラすだろう。

「それにさーせんせえだって、せーらにおっぱいして欲しいんだよね？ だって、本気で手を出しちゃいけないって思ってたら、きっぱりダメ、できないって突き放すはずだし♪」

「う……」

「心配しなくても大丈夫……せーらはせんせえにお礼がしたいだけだから……せんせえはぁ…おっきいおっぱい、好きだよね？」

しっとり潤んだおもねるような眼差しで見つめられながら、僕にだけ聞こえる声で囁かれ、うん、と頷いてしまう。

「せーらの爆乳おっぱいで、気持ちよくして欲しいよね？」

せーらの両手が重たげなおっぱいを持ち上げてゆっくりと落す。たぶん……とニット生地の下に詰まった魅力が揺れる。

爆乳少女の裏垢事情

少女らしからぬエロティックな誘惑と快楽への期待に、ズボンの中で男の部分が痛いくらいに隆起していくのを感じながら、再び頷いてしまう。

「じゃあさ……これから、せーらと一緒にホテル行かなきゃだね？」

「うん……」

催眠術にかかったみたいに、僕はそう答えていた。

カフェを出た僕らはそのままラブホテル街へと足を向けた。

せーらちゃんは恋人みたいに僕の腕に抱き着いて、ずっと胸を押し当ててきていた。

布越しに触れる弾力を伴った柔らかな感触が気持ち良過ぎたし、何より異性にそんな風に密着されたこと自体、彼にとっては生まれて初めてだった。

緊張と興奮と不安とがない交ぜになって、まともな思考が働かなかった。誰かに見られているような気がした。受け答えも上の空で、けれどせーらはそんな僕の様子がおかしいのかずっと上機嫌だった。

「もー……せんせえ可愛い♡」

なんて、大人であるはずなのに年下扱いされているみたいだった。

「あ、ココだよせんせ、ほらはやく行こ」

せつつかれて、ラブホテルへと入る。レンガ調の壁が入り口を隠すように配置されていて、人目を憚ることをしているという不安感を一層かきたてた。

ムードのある落ち着いた照明で照らされたロビーで、丁度チェックアウトする大学生くらいのカップルとすれ違った。せーらちゃんを見て驚いている様子だった。背中越しに遠ざ



かっていく彼らの声に動悸が早くなる。

「お部屋どこがいい？ せんせえが決めていいよ」

エレベータの前に設置されたタッチパネルで部屋を決める。407号室。情報が自動で処理され、発行されたカードキーをフロントで受け取る。

眼鏡をかけた気弱そうなフロントの男は形式的なやりとりの間、僕の腕に抱き着いて胸を押し当てるせーらちゃんにチラチラと視線を送っていた。その表情は引きつっていて明らかに挙動不審だ。いや、それは僕もだろう。警察の目の前で盗みを働くような緊張感に胃がキリキリした。

呼び止められるのを恐れるように、せーらちゃんを急かしてエレベータに駆け込む。四階のボタンを押し、扉がしまるとホッと息を吐いた。

「よかった……」

「何がよかったの？」

音もなく上がっていくエレベータの中で、せーらちゃんがきょとんと眼を丸くした眼で僕を見上げる。

「いや、だってさっきのフロントの人、せーらちゃんのこと見てたし……年齢確認とかされたらって不安で……」

「くすくす……されるわけないじゃん、せーらはマスクしてるし。それにあの人が見てたのはココ」

と、自分の胸を持ち上げて落とす。大質量の柔肉がぶるんっ、と大げさに揺れる。

「すれ違う人もみんなそう。せーらのおっぱいしか見てないし、学校にいなかったらこんな爆乳の子が大人じゃないなんて思わないでしょ？」

「そ、そうだね……こんな、すごいおっぱいだもんね……」

言われてみれば当たり前の話だった。こんな規格外の爆乳を持っている子が、僕の半分以下の年月しか生きていない少女だなんて誰が信じられるだろう。

「くすくす……せんせえもおっぱいばかり見てるもんね♡」

ポーン、という電子音と共にエレベータの扉が開く。大理石長のタイルが敷かれた、落ち着いた照明の廊下が伸びていた。

「さ、行こ。男の人がみんなガン見しちゃうせーらの爆乳おっぱいはぁ……今日はせんせえだけのものだから……♡」

可愛らしい声質の、けれど少女とは思えない声色で妖しく囁きかけられたその言葉に、背筋がゾクゾクした。

407はエレベータから出てすぐそこだった。

小さなダイニングテーブルとソファ、それから大きなサイズのベッドが部屋の面積の体部分を埋めている。普通のホテルの一室のようなところだ。普通のホテルと違うところは入口のすぐそばにある精算機。それに、ベッドの傍の冷蔵庫を開けてみると何種類ものドリンクの中に薄さを誇るコンドームが平気な顔をして並んでいて、ここがセックスのための施設であるということを念押ししているようだった。

今から僕も、セックスではないけれど、ここで――。

体が芯から熱くなる。ズボンの中のモノがズクンと脈打った。

外が少し寒かったからか暖房が入っていて、室内はやけに暑く感じた。

「ねえせんせえ、上脱がないの？」

どうしていいかわからず部屋の中をあちこちとみていると、せーらちゃんがそう訊ねてきた。僕は慌てたようにジャケットを脱いで、入口の近くにあったハンガーにひっかけた。

振り返ると、せーらちゃんがじっとこっちを見つめていた。おもねるような下からの目線。顔を見ると自然とその下の年齢に不釣り合いなそれが目に飛び込んでくる。しかも彼女は両腕で胸を圧して元より大きいそれを寄せて上げるポーズで、僕に見せつけて挑発するみたいに。

「え、と……せーらちゃん、その……」

触りたい。柔らかさと大きさと重さを確かな実感として味わいたい。

二人つきりになったのだから、軽くタッチするくらい許してくれるかもしれない。それか、ハグくらいなら。誘って来たのは向こうなんだから。

けれど大人の僕が彼女にそんなことをするなんて許されることじゃない。いや、そもそもホテルに連れ込んでいる時点でアウトなんだから――。

「ふふっ……」

煮え切らない僕を見て、せーらちゃんはくすりと笑った。

「ど、どうしたの？」

「せんせえって、こういうところ来るの初めて？ ってかドーテーだよね？」

ドキッと胸が高鳴る。童貞という言葉の意味すらわからないような年齢の彼女の口からそんなことを聞かれるなんて思ってもいなかった。

「ホテルに入ったらいきなりやらしいことされるかも一ってドキドキしてたんだけど……せんせえ全然何にもしてこないんだもん……なんか安心しちゃった♪」

「いや、だって……そういうことするもんじゃないし……その……あの……」

「で？ せんせえってドーテーなの？」

「う……うん……童貞……それに、ほ、ホテルも初めてきた……」

僕の答えにせーらちゃんは「やっぱりそうなんだ」と勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。それに慣れている人種の悪意のない見下しの表情だ。

不快なはずなのに飛び切りの美少女がするその表情は、ゾクゾクするくらい妖艶で魅力的だった。

「せーらちゃんはどうなの？　こういうところ初めてじゃないの？」

「いやいや、初めてなわけじゃない♪」

「え……じゃあ、他にも男の人と……こういうことしてるってこと……！？」

若者の性の乱れについて叫ばれる昨今とはいえそんなことがあっていいのだろうか。

いや、そんな真面目ぶった意見僕が言えた義理ではない。けれど、彼女の爆乳をどれだけ色んな人が揉んできたのか……考えただけで下腹部に熱が集まっていく。

「えー……せんせえそういうの知りたいの？」

くすくすと微笑しながら、せーらちゃんは僕の腕に胸を押し付けてきた。

服の上からでもくっきりと張り出したおっぱいの柔らかで温かな谷間に、むにゅうっ…と腕が沈み込んでいく。

「せーらがあ……この爆乳おっぱいでえ……どんな風に同級生の男の子を可愛がってるのか、とかあ……大人の男の人でもせーらがおっぱいしてあげたらどうなっちゃうのか、とか……せんせえになら教えてあげてもいいけどお……」

自分以外の男との話なんて聞きたくはないはずだった。けれどこんな規格外の爆乳を誇る少女の淫らな行為に興味が無いと言えは嘘だ。聞いてみたい。想像してしまう。いつの間にか息が荒くなって、ズボンの中のモノは痛いくらいに張りつめていた。

「くすくす……せんせえもう勃起しちゃってるよ♡　せーらのエッチな姿想像しただけでおちんちん我慢できなくなっちゃった？」

「あ……その、うう……」

せーらちゃんは一切恥じらうことなく卑猥な単語を口にした。それは、彼女がその言葉を言いなれている証拠だった。最近の子はませている、と思ってすぐに頭の中で打ち消した。最近の子だからじゃない、この子だけが特別なのだ。

「じゃあすぐに始めちゃおっか……エッチな話もお……まあ気が向いたら、聞かせてあげる……くすくす♡　ほら、せーらは着替えてくるからせんせえはベッドで待ってて♡」

促されるままベッドに腰かける。

せーらは自分のバッグを手に洗面所の方へ向かった。着替えと言われてははじめは何のことかわからなかったが、すぐにDMでのやりとりを思い出した。

待ちどおしくて短いはずの時間は非常に長く感じたけれど、その間ずっとドキドキしっぱなしで、勃起も少しも萎えなかった。まるでオナニーを覚えたての頃に戻ったみたいだ。

ややあって戻って来たせーらちゃんは体操着姿だった。

「じゃーん♪　お待ちせ♪」

襟と袖口が赤く色づいた動きやすそうなシャツの胸のところに自然と視線が吸い込まれる。バレーボールを二つ詰め込んだんじゃないかというくらい不自然に膨らんで迫り出していて、それがせーらちゃんが歩くたびにゆっさゆっさと大げさに生地を歪ませながら服の中で揺れるのだ。下はブルマで張り出した腰のラインから伸びるむっちりとした太ももは白くて、観てもわかるくらい肌が綺麗で、手を伸ばしたくなるくらい蠱惑的だ。

「せんせえのリクエスト通りに体操着♪ ね、似合ってる？ エロい？ まあ、これ普段着てるやつなんだけどねー♪」

「す、すごく……似合ってるし、え、エロい……」

画像では何度も見ていたのに間近で見ると迫力は段違いだった。その圧倒的な魅力に、ただ見ているだけでどうにかなくなってしまいそうだ。まさに奇蹟のようなおっぱいだ。生まれてきてくれてありがとうと感謝を述べたくなる。こんな凄いものを普段体育の授業で見られるなんて同じクラスの男子は幸せ者だ。もし僕だったら毎日ズリネタにさせていただこう。

けれど、僕にとっての奇蹟はせーらちゃんにとっては日常に過ぎない。ド迫力のおっぱいに魅入られた僕を可笑しそうに眺め、

「ありがと、せーんせ♡」

僕の手を取っておっぱいを押し付けてきた。

「あ……」

ふかふかの感触と温かさが体操着を通して手のひらに伝わってくる。だが僕は困ったようにせーらちゃんを見ることしかできなかった。

「せんせえってほんと奥手なんだねえ……触ってみたかったんでしょ？ せーらの爆乳おっぱい♡ いいんだよ～思う存分揉みしだいちゃお♡ ほーら♡」

積極的におっぱいを押し付けられる。柔らかくずっしりとした極上の感触は、一瞬で僕の理性を崩壊させた。

「すっげえ……やわらか……これが、せーらちゃんの……おっぱい……」

力加減もわからないまま両手でせーらちゃんのおっぱいを掴むと捏ねるように揉みしだいていく。僕の頭よりも大きな、重量感たっぷりの乳肉の塊は力をいれたなりにたわんで、指の形にへこんで、けれど適度な弾力もあって心地よい反発を返してくれる。

何度もオカズにしてきたせーらちゃんのおっぱいをこんな風に好きにできるなんて……まさに夢のようだった。触っているだけで幸せな気分になってくる。

それに、だ。身に纏う体操着はせーらちゃんのロリータを強調しながら、ラブホテルの怪しげな装いとはあまりにも不釣り合いなのだ。そのギャップがいけないことをしているという気持ちを掻き立ててくるのである。

「あん♡ せんせえったら積極的……すぐにおっぱいに夢中になっちゃって……可愛い♡ したかったらあ……お顔ぐりぐり～ってしてもいいからね～♡」

けれど、僕の理性はもうブレーキをかけることは出来なかった。背徳感を覚えながらも甘い言葉に誘われるまま、ふくよかな谷間に鼻先を潜り込ませるように、生地の上から顔を押し付けていた。夥しい量感を伴ったふかふかの感触が頬を包み込んでくる。そのあまりの心地よさに思わずはあ……とため息が零れる。

と、息を吸い込んだ瞬間、快感が脳を直撃した。

「むううっ！？ んんんっ……♡」

「シャワー浴びてないからちょっと匂っちゃうかも♪ 今日暑かったし結構汗かいちゃってるんだけど……でもその方がせんせえも嬉しいよね？」

鼻腔の奥にねっとり絡みつような豊潤で香しい匂い。少し嗅いだけでその芳香の虜になっていた。少しでも濃い空気を求めるようにおっぱいに顔を擦り付け、荒い呼吸を繰り返してしまう。呼吸のたびに脳が痺れ、理性が曖昧になっていく。

「すんっ……すんすんっ……ふううっ……ふうう～……なんだこれ、はああ……せーらちゃんのおっぱい……すっげえいい匂いがして……すうううう……♡」

「やーん♡ くんくん匂い嗅いじゃって……せーらのおっぱいフェロモンって、なんか男の子を勝手に発情させちゃうみたいでさあ……こうやっておっぱいでお顔挟んであげたらみーんなそうなっちゃうんだよね～くすくす♡」

おっぱいフェロモン。確かにこれはそう呼ぶに相応しい代物だ。嗅いでいると心がダメな感じに解れていく感じがして、この気持ちいいおっぱいのことしか考えられなくなってくる。どんどんおっぱいに溺れていく。

「はああ……すううう……せーらちゃん……せーらちゃん……♡」

「んっふふ……そんなにせーらのおっぱい好きなら……せんせえのお顔、おっぱいで押し潰してあげるね♡」

宣言するが早いかせーらちゃんは僕の首に腕を絡め、体をベッドに押し倒してきた。

むにゅうううっ……と重たい乳塊が顔に柔らかく押し掛かってくる。おっぱいの重さと大きさを余すところなく受け止めさせられる。布地と肉に口も鼻も覆われて満足に呼吸もできない。たまに吸い込める空気はせーらちゃんのおっぱいフェロモンが高濃度に含まれていて、蕩けた脳はますます蕩けていく。

「せーらが調教してあげた男の子の中にはね～……こうやってばふばふ～っしてただけで……触ってもいないのに出しちゃう子もいるんだよ♡」

おっぱいを擦り付けるみたいに体をくねらせながら妖艶な声で囁くせーらちゃん。恍惚とした状態で聞くその声は危険なくらい心地よく頭の芯に響いてくる。

「出しちゃうって何のことか、大人のせんせーならわかるよね……」

せーらちゃんはそこで一息ついて、もっとおっぱいを押し付けながら。

「射精♡ 射精だよ♡ 男の子が一番大好きなやつ♡」

射精。彼女の年なら知らない子も多いであろうそのワードが、頭の中で反響する。

「せんせえも想像してみてよ……おっぱい潰けにされて……せーらのおっぱいの魅力に負けて……タマタマの中でドロドロに熟成された精液……びゅるるるう～っ……♡ どれくらい気持ちいいかなあ？」

甘く妖しい言葉に誘導されて、頭の中で快感を思い描いてしまうともうダメだった。そんな風に射精させられたい。そのことだけで頭の中がいっぱいになっていく。

「んっふふ……想像したらしたくなっちゃうよねえ～♡ おちんちんも……こんなにガッチガチにしちゃって……せんせえわかりやすすぎ～♡」

「あくっ、んんっ、ああっ……それ、いいい……」

ズボンの生地を押し上げる僕のモノを、せーらちゃんが太ももで挟み込む。

むっちりとした肉の心地よい圧迫に、反射的に腰が浮いてしまう。モゾモゾと揺するよう
に動かして、さらなる快感を貪ってしまう。

「うっわぁ……♡ せーらの太ももにおちんちん擦り付けちゃって……もう射精のことし
か考えられないお馬鹿さんになっちゃったのかなぁ？ くすくす♡」

柔らかな圧迫感と濃厚なおっぱいフェロモンに酔いしれながら、太ももにズボン越しに
ペニスを擦り付ける。刺激は単純なのに、興奮のせいで信じられないくらい気持ちよかった。

あっという間に性器全体が甘く痺れて、熱い欲望が込み上げ――。

「んんっ……んんんんっ――♡」

我慢なんてする暇もなかった。快感の閾値を超えた瞬間、ペニスが脈動しパンツの中に熱
いものが溢れ出していく。

最高に気持ちいい射精だった。普段のオナニーなんかで出す時とは比べ物にならなかつ
た。おっぱい漬けでトロトロになった脳内にさらに絶頂の快感が押し寄せてきて、全ての感
覚を気持ちいいで染め上げてしまうのである。

「あっは♡ 身体ビクビクさせちゃって……せんせえイっちゃったんだぁ……はやあい♡」

せーらちゃんにそんな風に笑われても、恥ずかしがることすらできず、強烈過ぎる射精の
余韻に浸ることしかできなかつた。汗ばんだ肌に冷房の効いた空気が冷たかつた。

「せーらのおっぱいの凄さ……思い知っちゃった？ くすくす♡ そんなにばふばふ気
に入ったならこのままずーっとばふばふし続けてえ……せーらの爆乳おっぱいに依存させち
ゃってもいいんだけどお……」

大げさな話には思えなかつた。せーらちゃんのおっぱいにはそれだけの魅力と快樂が詰
まっていた。だが、恐ろしさを感じると同時に、彼女に依存させられたいと思っている僕も
いた。

「でもさぁ、せんせえ……今日はパイズリしに来たんじゃなかつたの？」

パイズリ。少女の口から出た卑猥なワードに胸が高鳴る。

「パイズリしてもらいたい」冗談半分に送った行き過ぎたメッセージが今のこの瞬間のき
っかけなのだ。

「お顔にしてあげたいに……このおっきいおっぱいで……ガッチガチになつたおちん
ちんむにゆうう……♡ って挟んでえ……何回もおっぱいの中に入れ……してみた
いよね？ ね？」

おもねるように聞かれる。その表情は年相応なのにどこか妖艶で、いけないと思いつつも、
この黒々とした欲望に流されてしまう。こんな状態でお預けされたら男は誰だって抗えな
いという言い訳をしながら、負けを認めるようにせーらちゃんに懇願していた。

「し、したい……パイズリ、させてえ……」

「くすっ……いいお返事♡」

せーらちゃんは満足げに微笑するとベッド脇に置かれたバッグから筒状のボトルを取り出した。ローションだ。白い蓋を開けると容器を逆さにして、体操着の上から大胆にローションを垂らしていく。

「このローションた一つり使うと、おっばいにバフかかるんだよねー……♪」

せーらちゃんは愉しそうに言いながらローションを両手で塗り広げ、爆乳を捏ね上げていく。おっばい同士が体操着の中で淫らに形を変えながら押し合い圧し合い、粘度の高い液体が胸全体に塗り広げられていくその光景に、思わず生唾を飲み込んでしまう。

「んっふふ……じーっと見ちゃって……これだけでもすっごいエッチだもんね♡」

繰り返される湿潤な音色と、白い生地にうっすらと透ける肌、ピンク色の乳首。今からこの中に……そう考えただけで出したばかりの男の器官が疼いた。

僕は待ちきれないと主張するように、いそいそとズボンを脱いだ。充血したペニスは精液に塗れ、腹部に付きそうな勢いで反り返っていた。

「んっふふ……めっちゃおちんちんバッキバキになってる……パイズリ準備してるの見たら、精液またチャージされちゃった？」

「う、うん……だって、せーらちゃんのおっばい……エッチ過ぎるから……」

おっばい。パイズリ。おっばい。パイズリ。頭の中がその2つの言葉で染まっていく。

「くすくす……ね、せんせえはぁ……今までにパイズリしたことあるの？」

「ない、ない……その、せーらちゃんが初めて……」

ネットで見つけた専門の風俗で試してみようと思ったことはあったが、尻込みして結局行くことができなかった。他人に射精させてもらったのだからさっきのが初めてだ。

「そうなんだぁ……じゃあ、せーらがパイズリ童貞奪ってあげるね♡」

自信たっぷりに笑いながら口にしたその一言に強く心が揺さぶられた。自分よりずっと年下の彼女に自分の初めてを奪って欲しい、そんな倒錯した欲望に股間のモノがますます硬くなっていく。

「でも気を付けてね、せーらのパイズリ知っちゃったら……そこらの女の人のパイズリじゃ満足できなくなっちゃうから♡」

せーらちゃんはそう言うとベッドに正座し、体操着を軽く捲り上げた。下にも広いおっばいの下の部分がいやらしく覗く。谷間からは透明な粘液がとろお……と垂れていて信じられないくらいエロかった。

「さ、せーんせ♡ せーらのお膝においでえ……このえっろおいおっばい穴にい……その勃起おちんちんないないしてあげる♡」

この誘惑に抗える男がこの世にいるだろうか？ 言い逃れできない淫行で、せーらちゃんがその気になれば人生が終わるとわかっている、いやわかっているからこそ余計に魅力的なのだ。

僕は荒く息を吐きながらズボンを脱ぐと、中途半端なブリッジみたいな姿勢になって腰をせーらちゃんの膝に持ち上げた。



「いいこだね～……♡ それじゃ、せんせえのおちんちん……せーらの乳内にしまっっちゃうね……♡」

せーらちゃんはそう言うと、その巨大な双丘を両手で持ち上げ、屹立に向かってゆっくりと落としていく。亀頭の先がローションで濡れた谷間の入り口にそっと触れる。その艶めかしい感触だけで首筋の毛がそそけ立つ。

ぬぶぬぶぬぶう……重たいおっぱいとその重さを利用して肉棒をせめぎ合う柔らかな谷間に飲み込んでいく。大量の粘液のおかげで、少しも引っ掛からなかった。「んあっ、ううう……はああ……なに、これえ……すっげ……すっげええ……」

すごい。それ以外の言葉が見つからない。体操着に締め付けられた乳肉が龟头やカリ首にぬるぬると絡みついてきて、後に続く竿の部分には量感をアピールするように優しい圧迫を加えてくるのである。勃起の熱さがローションで温んだ体温に馴染んでいく感覚もなんとも言えず心地よかった。

一瞬で虜だった。この極上の柔心地を男の一番気持ちいい部分で存分に味わいたいと、半ば反射的に腰を浮かせ、おっぱいの形が歪むくらい強くヌルついた谷間を突き上げた。

「なに、これ……全部、ちんちん包まれて……おっぱいデカすぎだろ……」

「あっは♪ せんせえのおちんちん……せーらのおっぱいにないなさいされちゃったね♡」

腰を密着させているのに、龟头の先が反対から出てこない。いや、それ以前の問題だ。僕らのモノはせいぜいおっぱいの中ほどにしか達していないようだった。

「でも大丈夫だよ、せーらのおっぱいおっき過ぎるだけだから……せんせえのが小さいわけじゃないよ……くすくす……ほとんどの人はこうなっちゃうの♪」

言葉は慰めているのに、声には勝ち誇った響きがあって、改めてせーらちゃんの凄さをわからされたように思えた。

「何にも気にしないで……せーらのおっぱいに溺れようね～」

せーらちゃんは両手でおっぱいを押し、内部の乳圧を少しずつ上げていく。

ローションまみれの柔肉が四方からむにゅむにゅと押し寄せ、緊密に雄の器官に吸い付いてくる。その優しく、甘い乳圧に窒息してしまいそうだった。

ほとんど動かしていないのに、ただ軽く抱き締められているだけなのに、快感がペニスの芯にじわじわと響いてくる。

「あ、くうう……き、きもちいい……これ、ぎゅってされてるだけなのに……」

「せんせえおちんちんよわよわだね～♡ じゃあこういうのはどうかなあ？ ほーら……おちんちんにい……ばふばふ♡ ばふばふ♡ ばーふばふ♡」

お遊戯めいた掛け声に合わせてせーらちゃんはおっぱいを捏ねるように動かしてきた。体操着にキュンキュンに詰まったおっぱいが大げさに波打ち、ぬちゅぬちゅと湿潤な音と共に挟み込んだペニスをマッサージするみたいに愛撫してくる。

逃げ場なんてどこにもなかった。

密着され、圧迫され、揉みくちやにされ、あつという間に腰砕けだった。断続的に押し寄せる快感刺激に搾り出されるように精液がせり上がってくる。

「ああっ……こ、これ……き、気持ち良すぎて……くうっ……ダメっ……」

「ダメじゃないよ～♡ 気持ちいいなら素直に受け入れなきゃ♡ おちんちんついてる以上、せーらのおっぱいには勝てないんだからさあ♡」

せーらちゃんはおっぱいで僕を弄びながら得意げな笑みを浮かべる。

大の大人が自分のおっぱいに夢中になっている。その事実がたまらなく愉快だと表情が物語っていた。

「ほらあ……ばふばふ♡ ばーふばふ～♡ せーらのおっぱいでイっちゃお♡ せーし、搾り取られちゃお♡ はーい、パイズリお射精ど～ぞ♡」

甘い声においでおいでされるみたいに精液が引きずり上げられていく。

デカすぎるおっぱいに腰を押し付け、届く限界まで亀頭を潜り込ませて、液体状の欲望をドクドクと打ち放つ。

「うああっ……あああ……はあああ……くうう……」

「ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅうううう～♡ おっぱいに負けてお漏らしぴゅ～♡ くすくす♡」

せーらちゃんはその大きな胸で射精を受け止めながら、脈動するペニスをあやすみたいにじっくりと優しく乳圧を加え続けてくれた。

「いーっぱい出たね～♡ 二回目なのにおっぱいでおちんちんばふばふされただけでイっちゃうなんて……せんせえ早すぎない？」

「はあ……はあ……い、いや、だってこんなに気持ちいいなんて……知らなくって……」

もちろん女性経験の乏しい僕は、快楽に耐性が無い方だと思う。

けれどそれ以上にせーらちゃんが、彼女のおっぱいが凄いのだ。

今だって僕のものおっぱいの優しい抱擁の中で少しも萎えずに硬さを保ったままだ。

この爆乳は男を気持ちよく射精させるためだけに存在するんじゃないかと、そんな失礼極まりない感想さえい出してしまう。

「くすっ……でもさぁ……パイズリの気持ちよさってこんなもんじゃないんだよ？　こんなただのお遊び♡」

薄笑いを浮かべた唇をペロリと舌で舐める。

そんなせーらちゃんの妖艶な仕草にドキリとさせられる。

なんてエッチなんだろう——。

僕よりずっと年下なのに、その表情は少女らしさと大人びた色っぽさが同居していて、物凄く蠱惑的だった。

「ホントの気持ちよさ知りたかったらぁ……このまま、せーらのおっぱいに抱き締められたまま……腰振っちゃおっか♡」

ペニスの付け根の辺りがズクンと疼く。

出して間もないのに、もう二回も出した後なのに。もっとこのおっぱいに精液を出したいと肉体そのものが訴えているようだった。

「せんせえも、せーらにパイズリしてもらうためにオナ禁して精液溜めてきたんでしょ？　まだまだ、イけるよね♡」

「あ……うん……」

ぼーっとしたまま頷く。まるで催眠術にでもかけられたみたいだった。

「ほら、おっぱいはせーらが抑えててあげるから……好きなようにおちんちん出し入れしていいんだよ～♡」

「はぁ、はぁ……う、うん……」

その甘い誘惑の言葉に操られるように、僕はゆっくりと腰を前後させ始めた。

下腹がぶつかるたびに淫らな音と共に体操着に詰まった乳肉がたぶたと揺動する。

ローションと精液でぬるぬるになった乳肌が粘膜を摩擦し、みっしりと肉の詰まった柔らかな圧力が竿を扱き抜いてくる。

「くあっ……あああ……これ、すげえ……おっぱい、絡みついてきて……」

ただ挟んでいるだけで射精に追い込まれてしまったのだ。動きが加わった時の快感はこの世のものとは思えないくらい素晴らしかった。ストロークのたびに絡みついてくる乳肉に、下半身全部を持っていかれそうになる。

この気持ちのいい刺激がもっと欲しいと腰が勝手に動いてしまう。

大型のオナホを使う時みたいに体重を乗せて、乳肉の奥を亀頭で搔き混ぜるように何度も出し入れを繰り返す。

「んんっ、せーらちゃん……せーらちゃん……んんっ……」

「せーらのおっぱい気持ちいいね～♡　だらしのない顔でへこへこ～て迫力ゼロの情けない腰振りしてる姿、とっても可愛いよ～♡　くすくす♡」

手やオナホなんかとは比べ物にならない快感に、僕は蕩けた声を上げながら腰を振り続ける。セックスなんてしたことはないけど確実にセックスより気持ちいいと断言できる。

「気持ちよくなって腰へコ止めちゃダメだからね〜♡ ってか止められないか♪ くすすす♡ いつもお世話になってるせんせえにい……せーらがサービスしてあげるから……もーっとおっぱいにに溺れようね〜♡」

せーらちゃんはそう言うとおっぱいを動かし始めた。

優しい乳圧を加えながら腰の動きに合わせて上下するおっぱい。体操着に詰まった量感夥しい南半球がたばんたばんと下腹を叩くたび、その内部に取り込まれた肉棒はむっちり柔らかく締め付けてくる乳肉の狭隘で心地よく追い詰められていく。

「はあっ、んんっ……これ、いいっ……気持ちいい、気持ちいいよ……んんっ……」

ローション塗れの大きすぎるおっぱいに、根元から先端まで余すところなく擦り上げられ、扱きたてられる。せーらちゃんの爆乳おっぱいが織りなす快感の全てを男の一番弱い部分で味わう至福。

突き入れる時も、引き抜く時も、すべての瞬間が最高に気持ちいい。

腰から下が蕩けそうになって、ペニスが甘く痺れていく。

「ああっ、くっ……あああ……せーら、ちゃん……また、射精……イっちゃいそう……」

「くすすす……♡ せんせえさっきいったばかりなのに、もうびゅっびゅしちゃうんだ♡ 気持ち良すぎておっぱいに勝てないね♡ 負けちゃうね♡ 負けるの気持ちいいもんね♡ いいよ〜、またせーらのおっぱいに白いお漏らししちゃえ♡」

せーらちゃんが両手でおっぱいをぎゅっと抱きしめる。乳肉がいやらしい曲線を描いてたわみ、乳肉が一気に中心部へ押し寄せる。一気に高まる内圧がペニス全体をむぎゅううう……と押し潰してくる。

凶悪なまでに甘美な乳圧。

物理的に精液を引きずり出されるみたいに射精感が込み上げてくる。

その快感に喘ぎながら、僕は最後の瞬間に向かってスパートをかけるように腰を振り立てていく。狭く閉じた柔らかな乳肉を亀頭で懸命にかき分け、ぬるぬるのおっぱいに何度も粘膜を擦られながらも弱々しい抽送を繰り返す。

「ほらあ……負ける♡ 負ける♡ おっぱいに負けちゃえ♡せーらのおっぱいに降参して……男の子のだーいすきな白いお漏らししちゃうね〜♡ おっぱいにびゅっびゅ〜♡ びゅ〜びゅ〜びゅ〜♡」



「んあああ……はあっ、いくう
っ……でるううう……」

射精を促す甘い声に合わせて、
乳穴の奥に突き込んだ男の器官
が脈打ち、精液をドブドブと吐
き出す。突き抜けるような絶頂
感と爽快な放出感に全身が続々
と震える。

「あっは♡ お漏らしびゅっぴ
ゅ気持ちいいね～♡ ほらほら
あ……も一っつ出していいから
ね～……溜めてきた分、ぜーん
ぶびゅっぴゅしちやおうね～♡」

熱い迸りを受け止めながらせ
ーらちゃんはおっぱいをむぎゅ
むぎゅと押してくる。高まる乳
圧によって、快樂そのものが搾
り出されていくみたいだった。

蕩けるような恍惚感に酔いし
れながら、僕は最後の一滴まで

せーらちゃんの乳内に出し尽くしたのだった。

長い絶頂が終わると透ける体操着越しにおっぱいの谷間からちょろっと精液が溢れているのが見えた。二回も射精したはずなのに。出したものの多くは大きすぎるおっぱいに閉じ込められてしまっていた。

「はあああ……あああ……ぬ、ぬくよ……」

僕はおっぱいからペニスを引き抜くと、そのままの勢いでベッドの上に倒れ込んだ。

性器を放り出したままのだらしない恰好。けれど、脱力を伴う放出の余韻にすっかり疲れ切って、取り繕う余裕もなかった。

「はーい、お疲れ様♡ パイズリ射精気持ちよかったね～♡ くすくす♡」

金玉の中身が全部搾り出されるみたいな長い絶頂が終わった後もペニスはおっぱいの中で満足げに震えていた。もっと……いや、一生このまませーらちゃんのおっぱいに抱き締められていたかった。

「はーい、お疲れ様♡ パイズリ射精気持ちよかったね～♡ くすくす♡」

せーらちゃんはおっぱいからペニスを引き抜くと、体操着を着なおしてからおっぱいを手で押さえてゆっくりと身を起こした。どうやら、ローションや精液が垂れないようにしているらしかった。

「う、うん……よかった……こんなに、気持ちいい射精……初めてかも……今日は、そのほんと……ありがとう」

脱力を伴う放出の余韻にすっかり疲れ切って、性器を放り出したままのだらしない恰好でそう答える僕には最早年上の威厳なんてものは微塵も残っていなかった。いや、最初からなかったか。ずっと、リードされっぱなしだったし。

「んっふふ……そんな風に言ってくれて嬉しい♪ せんせえいつもせーらによくしてくれるから、いっぱい頑張っちゃった♪」

とはいえ、せーらちゃんだって嬉しそうに笑う声と表情だけなら年相応だ。射精して冷静になったせいか、再び後ろめたさが芽生えてしまう。受け身とはいえ、こんな少女にあんなことを……そう考えると背筋が寒くなった。どうにか今日のことを誰かに知られないようにしないと。

「さて……と、せーら体操着洗ったりしたいからすぐにお風呂に行くけど……せんせえはどうする？」

「え、ええと……あ、後にするよ……」

「そっか……じゃあ、お湯も張っとくねー」

すぐにはどうするか答えは出そうになかった。せめてせーらちゃんがお風呂に行っている間に今後のことを考えよう。そんな風に考えていると、彼女は突然耳元に唇をよせて囁いてきた。

「もしまだ出し足りなかったら……お風呂、入って来ていいよ♡ ここのお風呂ってソープマットついてるみたいだからさ……この爆乳おっぱいでえ……せんせえの体、じーっくり洗ったげるから♡ くすくす♡」

少女のそれとは思えない耳たぶに絡みつくような妖しい声に、僕の理性はたやすく絡めとられていた。体がかーっと熱くなった。もう出し尽くしたと思っていたはずなのに、股間のモノが再び硬くなっていった。

こんな状態で今後のことを考える、なんて出来るはずがなかった。

やがてシャワーの音が聞こえ始めた。しばし天井を眺めていた僕は、やがてベッドから身を起こしふらふらとした足取りでバスルームへと向かった。

「ほーら、おっぱいだよ〜♡ 好きなだけちゅっちゅしていいからね〜♡」

せーらちゃんはホテルの広いベッドに横になった僕の顔に量感たっぷりのおっぱいを押し付け、すでにガチガチになっていた男の器官を優しく握りこんで、緩やかに扱き始める。

いわゆる、授乳手コキというプレイだ。

僕は股間から伝わってくる艶めかしい刺激に悶えながら、目の前に差し出された重たいおっぱいにむしゃぶりついた。乳房の大きさに見合ったピンク色の陥没乳首は、舌で舐め転がすとすぐに充血しいやらしく勃起していった。

弾力のある突起を口に含んででもしない母乳を求めてちゅうちゅうと吸い付いていく。

安心感と幸せな感覚で胸がじんわりとする。その心地よさが下半身から伝わってくる快感と結びついて、もう、最高だった。

「せんせえったら赤ちゃんみたいに吸い付いちゃって……♡ せーらのおっぱい、そんなにおいちいでちゅか〜？ くすくす♡」

「うん、うん……んちゅっ……んんっ、おいしい……」

せーらちゃんの格好は白黒の牛柄のビキニにニーソックスとロンググローブ。カウベルと牛耳までつけてくれた。以前支援サイトにアップしていたコスプレ衣装を、僕のリクエストで持ってきてくれたのだ。

せーらさん(、)の生のコスプレで、しかもエッチなことまでしてもらえて、支援者の誰もが羨ましがれる状況に優越感を抱くなどという方が無理な相談だった。

せーらちゃんとのこんな関係はもう四ヶ月も続いていた。僕はせーらちゃんのコスプレをイラストにしたり、彼女をモデルにした短い漫画を提供したり、お願いされるままに彼女のアカウントの成長や支援者へのサービスに力を貸した。

そのお礼として月に1回、せーらちゃんの都合のいい日にこうしてホテルでエッチなことをしてもらっているのだった。

彼女との関係を続けるのは倫理的にも僕自身の活動的にも大きな問題がある。今でも心の片隅ではもうこんなことは止めるべきだと思っていた。

けれど、何の行動も起こせずにいる。せーらちゃんに関係をバラされることを恐れているというのはもちろんあった。せーらちゃんとのコラボをすることで、僕自身のフォロワーが増えたり、新しい仕事に繋がったりというメリットもあった。けれど一番大きな理由は……。

「あっは♡ 腰浮かせちゃってまちゅね〜♡ 白いおしっこびゅ〜ってしちゃいそうなんでちゅか？」

「う、うん……もう、出そう……お願い、出させてえ……」

「せんせえは相変わらずのよわよわおちんちんでちゅね〜♡ いいでちゅよ〜せーらのおっぱいちゅっちゅしながら、お漏らししーしーしまちょうね〜♡」

小馬鹿にしたようなけれどどこか甘い響きのある赤ちゃん言葉。男の弱点を知り抜いたような的確な手コキ刺激に、下半身が切なく疼くような射精感に支配されていく。

僕はせーらちゃんのおっぱいに吸い付いたまま、腰の力を抜いてその甘美な導きに身を委ねた。

「はい、はい……♡ おもらしーしー……しーしー……しーしーしーしー……♡」

おっぱいに甘えたまま腰を浮かせる。絶頂のタイミングは完全にコントロールされていた。しーしーの声に合わせてるようにせーらちゃんの手の中に精液がトプトブと溢れ出す。

年下の少女に甘やかされ、全てを委ねながらの蕩けるような極上の放出。

こんな気持ちいいことを教えられて、せーらちゃんから離れられるわけがなかった。まさに沼だった。一度足を踏み入れたら二度と離れられないおっぱいの沼。せーらちゃんのおっぱいに破滅させられるならそれでもいいとさえ思ってしまう。

「お漏らししーしー気持ちよかった？ くすくす♡」

緩やかにペニスを扱きながら優しく微笑むせーらちゃんが、僕に対してどう思っているのかはわからない。

僕にとってせーらちゃんはおっぱいの女神であり、計り知れない怪物だった。

彼女は時折僕に、学校でのことを語ってくることもあった。学校で男子をどんな風にイジメているのか、自宅謹慎させられたとか、母親が新しい担任を奴隷にしたとか、校長に仕返しする準備をしているとか、少女の口から語られる内容は信じ硬いものばかりだった。

本当のことなら大きな問題だ。だから信じないふりをして、僕はそういった話を適当な相槌を打って聞き流すことがほとんどだった。

僕はせーらちゃんに都合よく利用できる大人、くらいにしか思われていないかもしれない。何にしても嫌われていないようには思えた。

「でも、まだまだ出せるよね～♡ どうせいつもみたいにせーし溜めてきてるんでしょ？今日はフリータイムの日だから、いつもせーらのために色々してくれるせんせえに沢山お礼してあげるね♡」

せーらちゃんはウェットティッシュで手を拭くと、胸の谷間にローションをたっぷり垂らして、まだ硬いままの屹立をおっぱいで挟んでくれた。量感たっぷりの重さと柔らかさに僕のモノは完全に埋まっていた。乳肉が淫らな音を立ててたふたぶと揺れ始める。

下腹部を支配していく快感に僕は恍惚としたため息を吐き、せーらちゃんのパイズリに溺れるのだった。